

日韓プログラム予備教育生の教師観及び 授業観に関する一考察

安 龍洙・太田 亨・宋 有宰^{※1}

要 旨

本稿では日韓プログラム予備教育生を対象に、PAC分析法を用いて彼らの教師観と授業観について探った。教師観については、日韓プログラム予備教育生は教師に対して人生や社会の先輩として親のような気持ちで学生に接し指導することや、教師側が学生側の立場を理解し、学生と共感する教師が「いい教師」と考えていることがわかった。高校までとの教師観の比較については、被調査者2名とも変容がみられなかった。次に、授業観については、1) 能動的で自律的な授業、2) 学生主導の自律学習の授業、3) 学生が授業に集中する授業、4) 人間関係を重視した授業を「いい授業」と考えており、全体的に教師と学生や学生同士の人間関係を重視した授業を望んでいることがわかった。高校までとの授業観の比較については被調査者2名とも変容がみられなかった。教師観と授業観に共通した意識として、教師と学生、学生同士の人間関係や信頼関係を重視した教育が望ましいという傾向が強いことがわかった。今後、教師観及び授業観について事例を増やして更に検討し、日韓共同(協働)教育教授法を確立させるための具体的な方法について探る必要があると考えられる。

【キーワード】日韓プログラム、予備教育、教師観、授業観、PAC分析

I. はじめに

日韓プログラムは正式名称を「日韓共同理工系学部留学生事業」と言い、1998年に日韓両国首脳間で取り交わされた「日韓共同宣言」に基づき、2000年から始まったプログラムである。当初目標は、10年後の2009年の時点で、韓国から日本の理工系大学学部留学生が累計で1,000人に達することであったが³、その目標は1,024人と達成され、2010年から第2次10年間のプログラムが継続スタートした。

日韓プログラムの特徴の1つは、理工系学部入学前に1年間の予備教育が行われることであり、3月から8月までの前半を韓国で、10月から翌年2月までの後半を予備教

育学生（以下、「日韓予備教育生」と称する）が配置される日本の大学で、それぞれ教育が行われる。教育内容は、全員に共通する日本語教育に加え、彼らの将来の専門分野に必要となる、数学、物理、化学など理工系専門科目の教育が同時に行われる^{註2}。

予備教育が日韓両国にまたがった形で行われることから、日韓プログラムでは教育の「連携」が必須とされてきた。筆者らが行ってきた科学研究費による研究^{註3}もその連携の1つと言え、日韓共同（協働）で日本語教育、理工系専門科目、教務データベース、カウンセリングを含む、「日韓共同（協働）教育」教授法を確立させ、総合的な「日韓プログラム予備教育カリキュラム」を提案するのが最終的な目的となっている。

本稿では、韓国で日韓プログラム予備教育を受けている日韓予備教育生を対象に、教師観と授業観を検討する。教師観と授業観を同時に探ることにより、彼らが考える望ましい授業のあり方についての検討を試みる。「日韓プログラムの学生の多くは成人年齢に達しておらず、大学及び社会生活の経験がないため、学習に対する姿勢や心理的負担、進学後の学習などを考慮した予備教育内容が必要である」（酒匂他2009:65）。今後、よりシームレスな日韓プログラムの予備教育を行うために、日韓予備教育生が考える『いい教師』と『いい授業』について探り、日韓共同（協働）教育」教授法を確立させることが重要な課題の一つであると言える。本稿では、このような立場に立ち、日韓予備教育生が持っている『いい教師』及び『いい授業』に対する準拠枠を探るとともに、同様の手法で授業観を探った先行研究（安他1995、安他2004）と比較検討する。

本研究では、日韓予備教育生の教師観及び授業観を探るために、内藤（1997）が開発した個人別態度構造分析法（Analysis of Personal Attitude Construct: PAC 分析法）を採用する。PAC 分析法は、内藤（1997）が開発したもので、1）当該テーマに関する自由連想（アクセス）、2）連想項目間の類似度評定、3）類似度距離行列によるクラスター分析、4）被験者によるクラスター構造の解釈やイメージの報告、5）被験者による総合的解釈を通じて、個人ごとのイメージの構造を測定・分析する方法である。また、PAC 分析法は、特定個人を詳細に分析することによって、被験者個人の特性だけでなく、その個人が属する集団の共通の普遍性の解明も目指すことのできる方法である（内藤1997）。更に、同分析法は、研究者があらかじめ用意した質問項目に対して対象者が強制的に反応させられる質問紙法とは違って、対象者が自由に自発的に自ら項目を作り出し、それに基づいて自ら反応するため、授業における学習者や教師の授業に対する授業観を明らかにすることができる（安他1995）と考える。

II. 研究目的

本稿では日韓予備教育生を対象に、PAC分析を用いて「教師観」及び「授業観」を探るとともに、現在と高校までの「教師観」と「授業観」を比較してもらい、その変容についても検討し、日韓プログラム予備教育カリキュラム開発のための基礎資料を提供することを目的とする。

III. 研究方法

調査は次の手順にしたがって行った。まず、被験者に以下の刺激語を与え、そのイメージについて思いつくままに記入させた。

【刺激語】「あなたは『いい教師（授業観の調査では『いい授業』）』についてどんなイメージを持っていますか。思い浮かんだ言葉やイメージを、思い浮かんだ順に番号をつけて記入してください。言葉でも短い文でも構いません。」

その後、その連想イメージを重要と思われる順序に並べさせた。更にそれぞれのイメージ項目の組み合わせが、直感的イメージでその意味内容においてどの程度近いのかを7段階尺度で評定させた。この尺度での回答を基に、ウォード法でクラスター分析し、その結果に対する対象者自身の解釈を求めた。最後に連想項目のイメージについて、プラスイメージの場合は (+)、マイナスイメージの場合は (-)、どちらもいえない場合は (0) の記号を記入させた。

調査は、日韓プログラム・韓国国内予備教育の実施校である、ソウルの慶熙大学校国際教育院の責任者の許可を得て、被験者の指導教員の協力の下、2012年6月～8月にかけて実施した。被験者（教師観2名、授業観2名）は全員2012年2月に韓国の高校を卒業し、調査時に日韓プログラムの韓国国内予備教育を受けていた学生である。なお、調査はすべて韓国語によって実施し第1著者と第3著者が日本語訳した。

IV. 結果と考察

ここでは、まずクラスター分析の結果を示し、その結果に対する被験者自身の解釈を記述し、クラスター分析の結果と被験者の解釈について考察を行う。

1 教師観について

(1) 被験者 A の結果

A のクラスター分析の結果は図1の通りである。クラスター1は『1) 学生と意思疎通』『2) 学生の意見を収斂』『3) 学生の立場で考える』の3項目でクラスター名は「学生の立場で考える」である。これについて、Aは「今の先生は学生の立場を理解できていない」と解釈し、高校までとの授業観の変化はないと回答した。

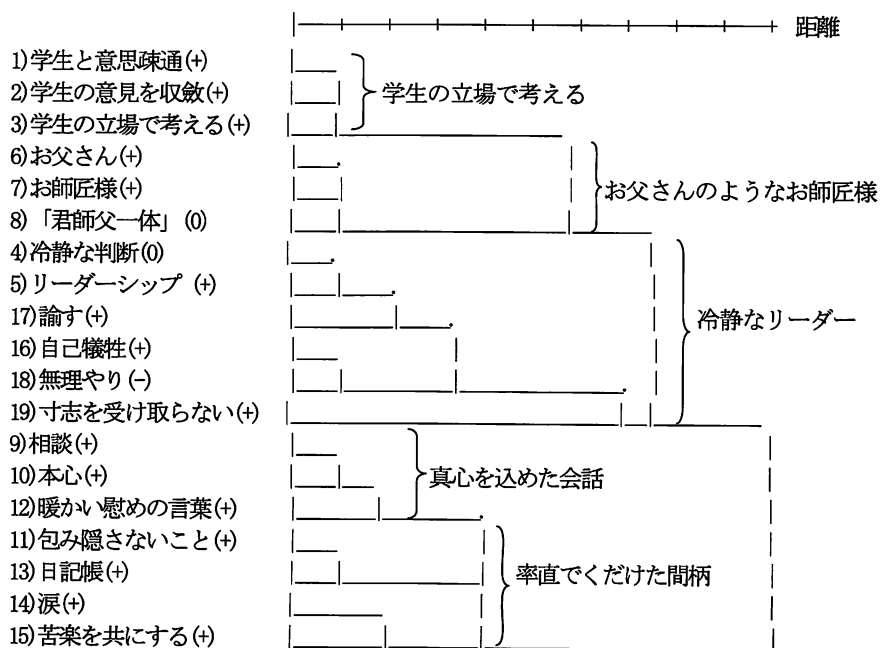


図1 被験者 A のデンドログラム^{※4}

クラスター2は『6) お父さん』『7) お師匠様』『8) 君師父一体』の3項目でクラスター名は「お父さんのようなお師匠様」である。これについて、Aは「先生は学生が自分の子供と同じだという考えに基づいて、誠意を尽くして訓戒する姿、お父さんが子供に道徳、生活、倫理などを教える姿、学生を丁寧に諭すように言い聞かせながら教える姿が思い浮かぶ」と解釈し、高校までとの授業観の変化はないと回答した。

クラスター3は『4) 冷静な判断』『5) リーダーシップ』『17) 諭す』『16) 自己犠牲』『18) 動じない』『19) 寸志を受け取らない』の6項目でクラスター名は「冷静なリーダー」である。これについて、Aは「望ましい教師、社会から期待される教師として、こうあるべきだという姿があるはずだ。例えば、自分が担当するクラスで起きた問題に責任を持つ、自分が受け持ってクラスの学生をよく指導する、などがそれだ。

少なくとも教師は、このような社会的に求められていることを知っておくべきことだ。「教育大学」を卒業したばかりの若い教師がプライドを持ち、強い意志を持って教える姿が連想される」と解釈し、高校までとの授業観の変化については「いつも私が求めている教師像だが、決して叶えられないと諦める気持ちがだんだん強くなっている」と回答した。

クラスター4は『9) 相談』『10) 本心』『12) 暖かい慰めの言葉』の3項目でクラスター名は「真心を込めた会話」である。これについて、Aは「学生と共感する先生のイメージだ。先生は教える仕事以外に、試験問題の作成、文書作成、校務などとても仕事が多い。それでも、教師は学生を正しく導くのが務めであり存在意義だ。学問的に、人間的に、その務めを果たすのに、一番いい方法は先生が学生と共感することだ。その意味で学生と共感することは非常に重要なことだ」と解釈し、高校までとの授業観の変化はないと回答した。

クラスター5は『11) 包み隠さないこと』『13) 日記帳』『14) 涙』『15) 苦楽を共にする』の4項目でクラスター名は「率直でくれた間柄」である。これについて、Aは「先生が率直で学生とくれた間柄になるイメージだ。先生が自分を飾らないで格式張らず、率直に学生に感情を出すことが重要だ。これは教師としてとても重要なことだ」と解釈し、高校までとの授業観の変化はないと回答した。

各クラスター間の比較においては、クラスター1と2の比較は「心から学生のためになることをするという意味で似ている。しかし、1は抽象的だが切実で実際に必要なことで、2は生真面目で現実とは掛かけ離れたことだ」、クラスター1と3の比較は「学生集団を正しく導くという点で似ているが、1は垂直的な人間関係で、3はやや水平的な人間関係だ」、クラスター1と4の比較は「1は学生と意思疎通のために、必ず必要なことで、4は1についての方法論だ」、クラスター1と5の比較は「学生と率直に共感することが必要だという意味ではクラスター1と5は同じだが、5のほうが率直という点ではより具体的だ」、クラスター2と3の比較は「学習集団を正しく導こうとする意味で似ているが、2は垂直的な関係で、3が水平的な関係だ」、クラスター2と4の比較は「共通点はお父さんと会話するような感じを受ける」、クラスター2と5の比較は「学生は、お父さん、先生に正直であるべき、という点では繋がっている」、クラスター3と4の比較は「教師として必要不可欠な点という意味で共通しているが、3は現実的でない」、クラスター3と5の比較は「やはり教師として備えなければならない姿だが、Cは多少理想論に近い」、クラスター4と5の比較は「先生と学生が本音を語り合うという意味では似ている」と解釈した。

全体のイメージについては「学生の気持ちをよく理解し、誰よりも親密な存在であ

るべきだ。その方法は共感と意思疎通だ」と解釈した。

(2) 被験者 B の結果

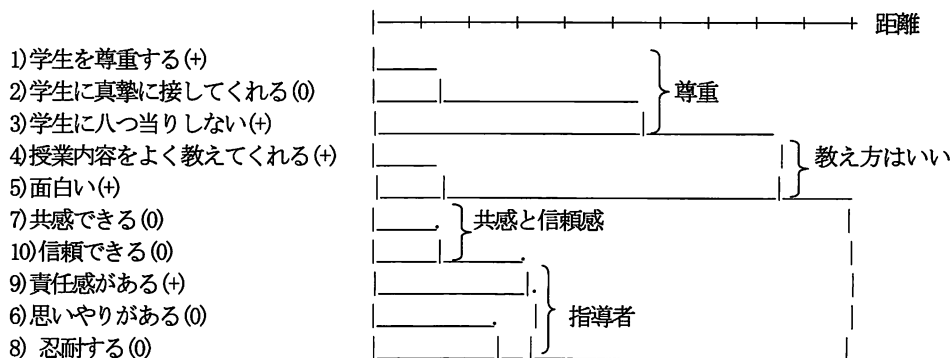


図2 被験者 B のデンドログラム

B のクラスター分析の結果は図1の通りである。クラスター1は『1) 学生を尊重する』『2) 学生に真摯に接してくれる』『3) 学生に当り散らす』の3項目でクラスター名は「尊重」である。これについて、Aは「先生は学生に対して一人の人格を持った人間として扱わず無視することがある。そのため、学生を一人の人間として尊重してくれる先生であってほしいと思う」と解釈し、高校までとの授業観の変化はないと回答した。

クラスター2は『4) 授業内容をよく教えてくれる』『5) 面白い』の2項目でクラスター名は「教え方はいい」である。これについて、Aは「面白くて、分かりやすく教えてくれる授業をする先生がいい先生だ」と解釈し、高校までとの授業観の変化はないと回答した。

クラスター3は『7) 共感できる』『10) 信頼できる』の2項目でクラスター名は「共感と信頼感」である。これについて、Aは「頼れる先生、色々な話ができ共感できる先生がいい先生だ。辛い時や悩みがあるときに気楽に相談できる先生がいい先生だ」と解釈し、高校までとの授業観の変化はないと回答した。

クラスター4は『9) 責任感がある』『6) 思いやりがある』『8) 忍耐する』の3項目でクラスター名は「指導者」である。これについて、Aは「時には親のように私を導いてくれる先生がいい先生だ」と解釈し、高校までとの授業観の変化はないと回答した。

各クラスター間の比較においては、クラスター1と2の比較は「学生を一人の人格を持った人間として尊重してくれる先生、学生と共感できる先生」と解釈し、全体の

イメージについては「先生と学生がお互いを尊重する間柄がよい関係だ」と解釈した。

(3) 筆者らによる総合的解釈

以上、被験者自身による解釈を述べたが、ここでは筆者らによる総合的解釈を行う。Aは、現在の教師は学生の立場を理解しておらず、学生の立場に立って考える教師を『いい教師』であると考えているようだ。また、教師に対して、父親のように学生に接し、道徳、生活、倫理なども教えてくれることを期待する教師観が表れている。更に、教師は社会的な責任を果たす義務があるが、実際はそうでないと考えているようである。特に、教師としての務めを果たすためにもっとも重要なことは、学生と共感することだと考えており、そのためには教師が学生に率直に感情を出し、共感することが必要だと考えているようだ。高校までとの授業観の変化については、社会から期待される教師や自分が求めている理想的な教師は現実には存在しないと諦めている様子が窺える。Bは、先生が学生の人格を無視することがあるし、人間として学生を尊重し気楽に相談ができる、親のような教師が『いい教師』であると考えているようである。また、授業を面白くて分かりやすく教える教師が『いい教師』だと思っているようだ。Bの全体のイメージとして、学生の人格を尊重する教師像が表れていると言える。

2 授業観について

(1) 被験者Cの結果

Cのクラスター分析の結果は図3の通りである。クラスター1は『1) いい先生』『3) 自発的な参加』『8) 心が満たされる』の3項目でクラスター名は「学生への関心」である。これについて、Aは「授業が徹底していて学生に関心を持つ先生の授業は、先生からの質問に対して学生が積極的に答え、学生はわからないことがあったらよく質問する。また、先生は、『それはいい質問だ』と学生を褒めながら教える。先生

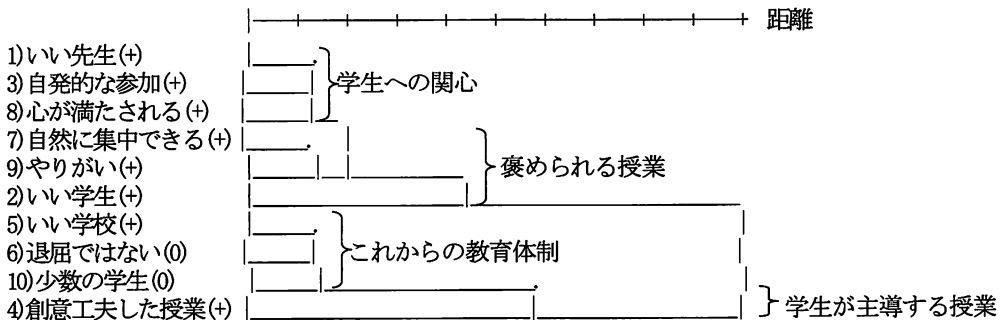


図3 被験者Cのデンドログラム

は学生に知識を正しく伝えることで、また、学生は面白くていい内容を教わったことで、お互いが満足する」と解釈し、高校までとの授業観の変化はないと回答した。

クラスター2は『7) 自然に集中できる』『9) やりがいい』『2) いい学生』の3項目でクラスター名は「褒められる授業」である。これについて、Aは「先生や親から見た時、いい学生とは、授業に集中し、いい成績を取る学生だ。小さい時から褒められてやり甲斐を感じる学生は、先生に褒められるために授業に集中する。また、そのことが習慣となり、自然に授業に集中するようになる」と解釈し、高校までとの授業観の変化はないと回答した。

クラスター3は『5) いい学校』『6) 退屈ではない』『10) 少数の学生』の3項目でクラスター名は「これからの教育体制」である。これについて、Aは「40名くらいの集団と一緒に授業を聞くと、先生は学生一人ひとりに気を配ることができなくなる。しかし、一部の私立学校やいい学校と言われているところは、少人数クラスだ。少人数クラスは、先生が学生一人ひとりに気配りしやすく、学生に合わせながら授業を行うことができるから、授業が退屈じゃなくなる」と解釈し、高校までとの授業観の変化はないと回答した。

クラスター4は『4) 創意工夫した授業』の1項目でクラスター名は「学生が主導する授業」である。これについて、Aは「学校の授業では、学生に知識を一方的に教え込むのが多い。しかし、学生同士の討論など色々な方法を使って教えたら、単に知識が増えるだけでなく、思考方の向上も期待できる。このような独創的な授業が『いい授業』ではないかと思う」と解釈し、高校までとの授業観の変化はないと回答した。

各クラスター間の比較においては、クラスター1と2の比較は「1と2は両方とも、一次的には先生に起因することである。いい先生は、学生に関心があり、授業を一所懸命に行い、学生を褒めて授業に自発的に参加させて満足感が出てくるようにする」と解釈し、のクラスター同士の関連についてはわからないと回答した。

全体のイメージについては「小説に出てくるような、生徒会長が主導する私立高校のような学校を連想する」と解釈した。

(2) 被験者Dの結果

Aのクラスター分析の結果は図4の通りである。クラスター1は『1) 全員が授業に参加する』『3) 最大限多くのことを教え、学ぶこと』『8) 忙しくてタイトな授業』『9) 課題がある』の4項目でクラスター名は「知識の習得に最適」である。これについて、Aは「学生と先生が授業に集中するイメージが思い浮かぶ。学生が知識を習得するのにもっともよい授業内容だ。」と解釈し、高校までとの授業観の変化については

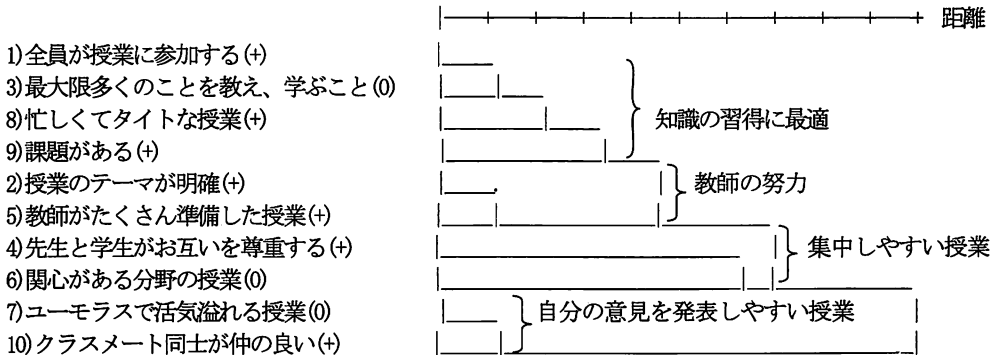


図4 被験者Dのデンドログラム

「高校の教師は入試問題を解くスキルを短時間に教えないといけないから、どうしてもタイトな授業になりがちだが、大学の授業は学生が自ら原理を理解する授業が多いのではないかと思う」と回答した。

クラスター2は『2) 授業のテーマが明確』『5) 教師がたくさん準備した授業』の2項目でクラスター名は「教師の努力」である。これについて、Aは「教師がpptやプリントなどを使って進める授業が連想される。教師が学生のために熱心に授業を進めるというイメージだ」と解釈し、高校までとの授業観の変化はないと回答した。

クラスター3は『4) 先生と学生がお互いを尊重する』『6) 関心がある分野の授業』の2項目でクラスター名は「集中しやすい授業」である。これについて、Aは「肯定的なイメージで、集中しやすい授業だ」と解釈し、高校までとの授業観の変化はないと回答した。

クラスター4は『7) ユーモラスで活気溢れた授業』『10) クラスメイト同士が仲の良い』の2項目でクラスター名は「自分の意見を発表しやすい授業」である。これについて、Aは「活気溢れる授業の雰囲気というイメージ。このような活気溢れ、クラスメイト同士仲がいい環境では自分の考えを発表しやすい授業だ」と解釈し、高校までとの授業観の変化はないと回答した。

各クラスター間の比較においては、クラスター1と2の比較は「1と2は、先生が熱心にやろうとする授業で、ためになる授業だ。1は受け身的で堅苦しい授業、2は能動的で自律的な授業という感じを受ける」と解釈し、他のクラスター同士の関連についてはわからないと回答した。

全体のイメージについては「ここで挙げたイメージ項目は、全部授業に必要な要素だと思う。この要素を適切に取り入れると『いい授業』になると思う」と解釈した。

(3) 筆者らによる総合的解釈

以上、被験者自身による解釈を述べたが、ここでは筆者らによる総合的解釈を行う。Cは、学生に関心を持ち、学生を褒める教師が『いい教師』で、学生は褒められることで授業に集中し、これからの教育体制として少人数クラスで、先生が学生一人ひとりに気を配り学生に合わせてながら行う授業を『いい授業』と考えている。授業の方法としては、知識を一方的に教え込むのではなく、討論形式の授業が『いい授業』と考えている。全体のイメージとして、小説などで描かれている学生が主導する授業を理想的な授業と考えているようだ。Dは学生が知識を習得するのにもっとも『いい授業』として、学生と先生が集中する授業をイメージしており、その具体的な方法として先生と学生がお互いを尊重し、関心がある分野の授業が集中しやすい授業であると考えている。また、パワーポイントやプリントなどを使って、教師が努力する授業を『いい授業』であると捉えている。更に、ユーモラスで活気溢れた授業やクラスメート同士が仲の良い授業は自分の意見を発表しやすいため、『いい授業』であると考えているようだ。高校までとの授業観の変化はなかったが、『いい授業』として大学では、高校のような入試問題を解くスキルではなく、学生自ら原理を理解する自律的な授業を望んでいることが窺える。

V. 考察及び今後の課題

ここでは、第4章の結果を踏まえた上で、日韓予備教育生の教師観と授業観の特徴について考察する。まず、教師観について被験者2名の共通点を中心にその特徴を探る。

①人生や社会の先輩としての教師像

Aの『6) お父さん』『7) お師匠様』『8) 君師父一体』『15) 苦楽を共にする』『お父さんが子供に道徳、生活、倫理などを教える姿』『望ましい教師、社会から期待される教師として、こうあるべきだという姿があるはずだ』『…それでも、教師は学生を正しく導くのが務めであり存在意義だ。学問的に、人間的に、その務めを果たすのに…』『(教師は) 学生の気持ちをよく理解し、誰よりも親密な存在であるべきだ』、Bの「頼れる先生、色々な話ができて共感できる先生がいい先生だ。辛い時や悩みがあるときに気楽に相談できる先生がいい先生だ」「時には親のように私を導いてくれる先生がいい先生だ」などから教師について社会的な先輩として期待している態度構造が窺える。特に、Aの「君師父一体』『7) お師匠様』『お父さんが子供に道徳、生活、倫理などを教える姿」と、Bの「時には親のように私を導いてくれる先生」などから、

日韓予備教育生は教師に対して単に知識を教わるだけでなく、親のような人生の相談者としての教師像を期待しており、この結果は、儒教社会である韓国社会の教育の一端を示す一例であると言えよう。

②学生立場を理解し、共感する教師像

Aの『1) 学生と意思疎通』『2) 学生の意見を収斂』『3) 学生の立場で考える』『今の先生は学生の立場を理解できていない』、「…一番いい方法は先生が学生と共感することだ。その意味で学生と共感することは非常に重要なことだ」「学生の気持ちをよく理解し、誰よりも親密な存在であるべきだ。その方法は共感と意思疎通だ」と、Bの『1) 学生を尊重する』『2) 学生に真摯に接してくれる』『3) 学生に八つ当たりしない』『学生を一人の人間として尊重してくれる先生であってほしい』などから、教師が学生の立場を理解し尊重するような教師が『いい教師』であると考えられる傾向が強いことがわかる。

③高校までとの授業観の変化

高校までとの授業観の変化については、Aの1) 学生への関心(クラスター1)、2) 褒められる授業(クラスター2)、3) これからの教育体制(クラスター3)、4) 学生が主導する授業(クラスター4)、Bの1) 知識の習得に最適、2) 教師の努力、3) 集中しやすい授業、4) 自分の意見を発せしやすい授業など、A、Bともにすべてのクラスターにおいて変化がみられなかった。

次に、授業観の特徴について被験者2名の共通点を中心にその特徴を探る。

①能動的で自律的な授業観

Cの『3) 自発的な参加』『学生同士の討論など色々な方法を使って教えたら、単に知識が増えるだけでなく、思考方の向上も期待できる』『学生を褒めて授業に自発的に参加させて満足感が出てくるようにする』、Dの『1) 全員が授業に参加する』『…大学の授業は学生が自ら原理を理解する授業が多いのではないかと思う』『クラスメート同士仲がいい環境では自分の考えを発せしやすい授業』『…(クラスター)2は能動的で自律的な授業という感じを受ける』などから、学生が従来の教師中心の授業から脱皮し討論形式などの授業を通して学生自ら考える自律学習による授業が『いい授業』であると考えられる傾向が窺える。

②従来の詰め込み式授業に対する批判的な授業観

『3) 自発的な参加』『…学生が積極的に答え、学生はわからないことがあったらよく質問する』『学生が主導する授業』『学校の授業では、学生に知識を一方向的に教え込むことが多い。しかし、学生同士の討論など色々な方法を使って教えたら…』『…授業に自発的に参加させて満足感が出てくるようにする』『…生徒会長が主導する私立高校の

ような学校を連想する」、Dの「…自分の考えを発表しやすい授業」「…(クラスター) 2は能動的で自律的な授業という感じを受ける」などから、①でも述べたように、従来の一方的な詰め込み式授業に対する批判的な態度が強く表れており、学生中心の授業を望んでいることがわかる。

③集中できる授業

Cの『7) 自然に集中できる』『先生や親から見た時、いい学生とは、授業に集中し(中略)先生に褒められるために授業に集中する。また、そのことが習慣となり、自然に授業に集中するようになる』、Dの『1) 全員が授業に参加する』『学生と先生が授業に集中するイメージが思い浮かぶ』『肯定的なイメージで、集中しやすい授業だ』などから、授業の雰囲気散漫ではなく、学生全員が集中する授業を『いい授業』であると考えていることがわかる。

④人間関係を重視した授業

Cの「…学生に関心を持つ先生の授業」「先生に褒められるために授業に集中する」「…先生が学生一人ひとりに気を配りしやすく、学生に合わせてながら授業を行う…」「いい先生は、学生に関心があり、授業を一所懸命に行い、学生を褒めて…」、Dの『4) 先生と学生がお互いを尊重する』『10) クラスメイト同士が仲の良い』などから、教師と学生や学生同士がお互いに関心を持ち、人間関係を重視した授業が望ましい授業であると考えていることがわかる。

⑤高校までとの教師観の変化

高校までとの教師観の変化については、Cの1) 学生の立場で考える(クラスター1)、2) お父さんのようなお師匠様(クラスター2)、3) 冷静なリーダー(クラスター3)、4) 真心を込めた会話(クラスター4)、5) 率直でくれた間柄(クラスター5)、Dの1) 尊重、2) 教え方はいい、3) 共感と信頼感、4) 指導者など、A、Bともにすべてのクラスターにおいて変化がみられなかった。特に、Aの3) 冷静なリーダー(クラスター3)では「いつも私が求めている教師像だが、決して叶えられないと諦める気持ちがだんだん強くなっている」と述べていることから、韓国内の予備教育を経験し理想を求めるのを諦める気持ちが強くなっている様子が窺える。

以上、本稿ではPAC分析法を用いて日韓予備教育生の教師観と授業観について探ってみた。その結果、教師に対して人生や社会の先輩として親のように接し指導すること、教師側が学生側の立場を理解し共感することが、『いい教師』の条件として考えていることがわかった。一般に、教師中心の「儒教式の教育方法」の影響が根強く残っている韓国社会では、教師は人生の先輩として学問のみならず人生の生き方について模範を示しながら教育に携わる義務があるとされており、そのような韓国社会の教

師像の一端を示す結果であると言えよう。また、自律的な授業を『いい授業』であると考えている授業観からもわかるように、韓国の受験中心の教育に対する反動と思われる授業観が示されたのも特徴の一つであると考えられる。

教師と学生、学生同士の人間関係を重視した授業が望ましいとする授業観や、学生と共感し信頼できる教師が『いい教師』とする授業観は、先行研究(安他1995, 安他2004)の日本語専攻の韓国人大学生の授業観の結果と一致する。また、『いい教師』観に関する量的研究を行った上原(2008)の報告で、日本で学ぶ中国人留学生と日本人が考える「良い先生」についての上位3位までの回答率をみると、中国人の「良い先生」は1位:生き方を含めた学問指導(29.7%), 2位:親和的・友好的(23.1%), 3位:博識(22.0%)であるのに対して、日本人は1位:学生への配慮(学生の困難理解等)(23.0%), 2位:啓発的教授法(22.0%), 2位:生き方を含めた学問指導(22.0%)となっており、日本人に比べて中国人のほうが教師に対して人生の先輩としての役割を期待する要望が強いことが示されている。上原は、(2008:75)は「中国の伝統的な教師に対するイメージは、儒教的教師観が反映されて、清廉、清貧といった言葉で表されることがある。(中略)教師は宇宙/神、皇帝、親同様に尊敬、敬畏であった」^{注5}と述べている。本研究の結果からも日韓予備教育生の教師観において、被験者Aの「君師父一体」のイメージ項目のように、儒教的な教師観に起因すると思われるものが多く見られた。このような韓国・中国の学生の教師観の共通性については、事例を増やして更に検討する必要があるだろう。

日韓プログラムの学生と一般の学生を大学進学という観点から比較した場合、1)高校在学中に学生自らの意志で日本留学を決めること、2)韓国国内の選抜試験の受験に当たっては所属高校長と市・道の「教育監」(日本の「教育長」相当)の推薦が必要であるため、教師の影響力が大きいこと、3)国費留学生として選抜され、学部4年間は授業料免除の上に奨学金が支給されるため、経済的な心配がないこと、4)韓国と日本で半年ずつ予備教育を受けてから日本の国立大学への進学が決まっているため、大学入試が免除されていること、などが大きな特徴といえる。今後、日韓プログラムの学生のこれらの特徴を踏まえながら、教師観及び授業観の結果についても更に事例を増やして検討する必要があると考えられる。また、日本での予備教育を終えた日韓予備教育生に対しても同様の調査を実施し、授業観の変容についても探る必要があると考えられる。これらを今後の課題としたい。

付記:本研究は平成24年～平成26年度科学研究費補助金(基盤研究(B)研究代表者:太田亨, 課題番号24320093)による研究成果の一部である。

【注】

- 1 安龍洙（茨城大学留学生センター）、太田亨（金沢大学国際機構留学生センター）、宋有宰（金沢大学共通教育機構）
- 2 これまでの日韓プログラムの学生の専門分野のうち多数を占めるのは、機械工学、情報科学、物理学、数学などであったため、数学と物理はほとどの予備教育でも授業科目に含まれてきた。しかしながら、化学、生物、地学は学生の専門上必要と見なされる場合に教育が行われている。
- 3 (1)平成19-21年度科学研究費補助金・基盤研究 (B)・課題番号：19320076（研究代表者：金沢大学・太田亨）、(2)平成24-26年度科学研究費補助金・基盤研究 (B)・課題番号：24320093（研究代表者：金沢大学・太田亨）
- 4 テンドログラムとは、与えられたデータから似通ったもの同士を集めていくつかのグループに分類するクラスター分析において、各個体がクラスターにまとめられているのを樹形図で表したもののことをいう。
- 5 このことについて上原は「共同研究者、劉徳潤先生に教示を受けた」と述べている。

【参考文献】

- 安龍洙・渡辺文夫・内藤哲雄（2004）「日本語学習者と日本語教師の授業観の比較—個人別態度構造分析法（PAC）による事例研究—」『茨城大学留学生センター紀要』2, pp.49-59
- 安龍洙・渡辺文夫・才田いづみ（1995）「韓国語学習者の授業観の分析—授業に対する認知的変容についての事例的研究—」『東北大学文学部 日本語学科論集』5, pp.1-12
- 上原麻子（2008）「中国人の教師観」『中国人学生の授業観・教師観—国内学生と留日学生を対象に』第6章, 広島大学高等教育研究開発センター, pp.75-89
- 内藤哲雄（1997）『PAC 分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版

Analysis on Korean Students' Attitudes Towards Instructors and Instruction, a Case of the Preliminary Education of the Japan-Korea Joint Exchange Program for Science and Engineering Students

An Yong Su, Akira Ota and Song Yu Jae

Abstract

This paper examines Korean students' attitudes towards instructors and instruction utilizing a method of the PAC Analysis, who prepare for the Japan-Korea Joint Exchange Program of Science and Engineering. They observe a "good instructor" as a person with richer life and social experience, who approaches them as a parent, understanding their position, and with empathy. Compared with their *good instructor's* view in high school, neither of two students has changed. The other two students also found a "good instruction" as 1) active and autonomous, 2) student-centered and autonomous, 3) helping students to concentrate in class, 4) emphasizing interpersonal relations, creating an overall image, that stresses on interaction between instructor and student, and/or among students. Once again, neither of their view has changed compared to the same one in high school. The fact, they put stress upon interpersonal relations and trust between instructor and student, and/or among students themselves, represents major characteristic, both common to their instructor's view and instruction's one. We hope to increase the number of cases, and to obtain suggestions to establish a better teaching method for the program.

[Keywords] Japan-Korea Joint Exchange Program for Science and Engineering Students, preliminary education program, instructor's view, instruction's view, Analysis of Personal Attitude Construct (PAC)